

定時制高校における「書く」ことの教育実践

— 五 四 年 度 一 年 生 の ば あ い —

佐 藤 秀 之

はじめに

定時制工業高校の生徒に対して、どのように学習意欲をもたせるかということについては、ここ数年来大きな課題となっている。

本校の場合も、毎年度始め「年間努力事項」を各教科ごと設定して、全校あげて実践するよう努力している。その中で毎年柱となるのが「低学力」の問題である。私は本年度の国語科の目標の中から、「教育漢字を中心とした漢字の読み書き」と「文章を書いたり、詩、短歌などの創作をとおして『書く』ことへの抵抗をなくす」ことを中心目標として実践してきた。しかし、どちらの指導も充分な効果もあがらずに一年間を終了してしまつたように思う。以下そのささやかな試みを記し御批判をたまわりたいと思う。

一、漢字の読み書きの指導

昭和五二・五三年度は、新しい教材にはいった時、あらかじめその教材の中から選び出した漢字をプリントで用意し、一読したあと練習するというふうなことをやった。その中で漢字が読めない、書けない生徒の多くは、漢字の性質を理解していない場合が多いことがわかった。昭和五二年七月、簡単な部首の名前を書かせてみた。

その正答率は以下のとおりである。

二年生（全員23人）		三年生（全員31人）	
言	83%	手	61%
イ	83%	才	56%
エ	57%	イ	74%
才	47%	イ	71%
イ	78%		
才	70%		

以上の結果を重視して、それ以後毎年「部首と意味」の学習を二時間設定している。

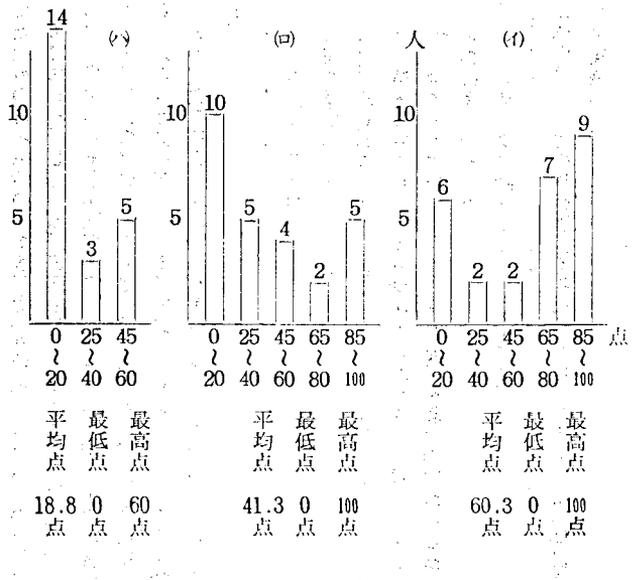
1	木	木	漢字例
2	イ	イ	に関係がある
3	十	十	に関係がある
4	口	口	に関係がある
5	言	言	に関係がある
6	才	才	に関係がある
7	金	手	に関係がある

空欄に通語を入れよ。

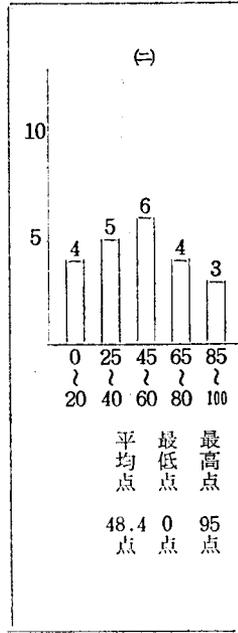
8	イ	「ゆく」とか「みちに」関係ある（ ）
9	エ	歩く動作を表わす字（ ）
10	厂	に關係がある（ ）
11	糸	に關係がある（ ）

本年は、教育漢字、当用漢字の練習問題集を中心に学習した。問題集より抜いた漢字のプリントを、一单元終了すると、次の單元にはいる前、一時間としては練習していった。一年間を通して十五枚を消化したが、各回の漢字のすべてを覚えてしまうということは、とてもできず、それにだいたいの到達度が教師や生徒自身にわからないという欠点があった。そこで十一月、一年生全員に小学校三年から中学校三年までに新出する漢字を、各段階に分けてテストをしてみた。各学年新出漢字より任意に20語ずつ選択した。

- (1) 小学校三〜四年（書き取り）
- 悪者 愛情 安全 案内 以後 衣服 囲む 医者 委員
 - 育てる 飲む 泳ぐ 新芽 階段 公害 覚える 旅館
 - 願う 季節 喜ぶ
- (2) 小学校五〜六年（書き取り）
- 圧力 胃 異なる 移転 遣伝 営む 利益 延長 思入
 - 価値 我が国 変革 額 株式 週刊 血管 新幹線 肉眼
 - 疑う 逆転
- (3) 中学校一年生（書き取り）
- 哀れ 握手 偉大 違反 威圧 影響 越える 炎上 煙



- 押す 記憶 穏やか 夏休暇 菓子 怪しい 破壊 比較
- 列る 患者 鑑賞
- (3) 中学校二〜三年生（読み）
- 企画 鬼畜 遷厝 忌中 既婚 光輝 便宜 偽造 拠点
 - 凶悪 享楽 木琴 愚劣 薰風 契約 捕鯨 雇用 呉服
 - 覚悟 恐慌



以上の調査からは正確な実力判定は無理であるが、かなりの生徒が小学校の段階で出てくる漢字が書けないということがわかった。来年度は、教育漢字、備考漢字と中学校での新出当用漢字について、学年順に整理しプリント冊子をつくり、段階ごと一定の到達点に達したら次の段階に進むという方法をとりたいと思っている。

二、文章表現力と創作

本校の生徒は「書く」ことに対する嫌悪というか、「文章を書きなさい」というときまわって露骨な拒否反応を示してきた。私は、何とか「書く」ことに対する抵抗をなくしてやる方法はないものかと考えてきた。

五二年度に簡単な相互批評方式を実践した。自分の意見を入れた文章を自由に書かせ、すぐプリント化して全員で読む。主題などに関してみんなが自由な意見、批評を出し合う。一クラスの人数が数人から十数人の男子ばかりの定時制高校、笑いや皮肉、ほめ言葉などが率直に出るこの方式を、作文授業の一つのパターンとしてい

また生徒の日常生活の中で表現力を身につけさせるものとして、クラス日誌を利用している。日直の生徒が書く感想欄は五行、字数にして五〇字から七〇字程度の文しか書けない。短作文の練習になっている。生徒の書いたものには一言書いてやる。良い文はほめてやる。ふざけた文は笑ってやる。皮肉ってやる。こういう評を加えてやると、次の日直も進んで何か表現しようとする努力しているようである。

(五三年五月九日)

今頃の季節が一番いいと思う
外では小鳥が鳴き木々などは、青々とした新芽を出しています
時々校庭の片スミを女学生が何か話をしては、わらいながら通りすぎて行く、そう言った光景を教室の窓からながめるのは楽しいものです

(評) 文学的なすばらしい文です。

○本年度は一年生の現代国語を担当したが、次のような年間計画を立てて実践した。

- 四月 自己紹介の文を書かせる (四百字程度)
- 五月 小説「羅生門」のテーマ (四百字前後)
- 九月 生活体験発表文
- 十月 近代詩学習後、詩の創作
- 十一月 短歌学習後、短歌の創作
- 十二月 学校文集「あすなる」原稿

一月 俳句学習後、俳句創作

三月 手紙の書き方学習後、実際に書く

○四月の自己紹介文は、四百字詰め原稿用紙一枚でということを書かせたが、殆んど生徒が二百字前後の簡単なものしか書けなかった。しかし始めなので文章を書く時の注意は最小限にとどめた。

自己紹介

氏名 寺内英樹

僕は、中学生の時、岡山にいたので広島のこととはよくわからないし高校はどこにあるのかもわかりません。家の近くに市工があったのでよしの学校でがんばろと思った。けど全日制が落ちてしまひ山陽高の進めもありましたがそれを押しのけこの定時制になんとか合格しました。入学式の時から不安や期待などいろいろありますがその心をはじきとばしていこうと思います。そのな僕ですがよろしくおねがいします。

○五月は芥川龍之介の「羅生門」を学習し、そのまとめの段階で「小説をとおして作者が述べたこと」と題して書かせた。見当はずれのがたくさん出て、私の授業のまずさを改めて感じさせられたものである。

「羅生門」について

機一 上野晴夫

下人は、きびしい状況の中で生きるための手段として、盗

人を腹に決めるが決心がつかない。しかし、老婆との出会いで勇氣を見出し、決心をしたが結局、作者は、どんなきれいな心を持っていても、人間というものは、いよいよ苦勞のどん底にくると悪いことでもやらにゃいけんようになる人間の心理のみにくさを、どぎつく出している。

「羅生門」について

土一 中原幹彦

自分はこの小説を読んで、作者が言いたかったことは、平安時代をかりて作者自身が生きている時代、つまり現代の世の中の事を、風刺していると感じた。その根拠は、文中にきびとか、サンチマンタリズムとかいう、現代に通ずるものをあえて取り入れていることや、文中の時代と、この小説の書かれた時代に、共通点があるからそう感じた。作者の生きていた時代は、帝国主義の時代で自分たちの生きている現代のように、言論の自由は無く、小説にでもしなくては作者の、帝国主義に対する腹の虫はおさまらなかつたのではないだろうか。

この生徒の発想にはおおいに驚かされたものである。

○定時制では毎年十月に生活体験発表大会という大会がある。働きながら学ぶ生徒の体験を発表し、お互い励まし合うという目標で開かれている。私は国語の時間をつかって、毎年九月にはいると「生活体験」の文章を書かせ、作文の授業にすると同時に、各クラスで発表し合い、それぞれの進路や将来の展望を考えさせる時間とし

て、展開している。この大会は県大会があり、その中で一名が全国大会に参加するようになっていいる。本校では特別に一日とり、校内大会を開いているが、クラスで発表した生徒の中からみんな校内大会で発表する生徒を選ぶ。毎年十数名の参加（全校生徒百三十名前後）の盛況である。そして今年は、校内で優勝し代表となった一年生の富隆志君が県大会で優勝し、一人十二月の全国大会に県代表として参加した。本校では初めての快挙であった。

私は、最初に生徒が書き出しやすいように次のようなプリントをつくって配布する。空欄の中の文は、県代表にはならなかったが、校内大会で発表したA君のものの一部である。

生活体験発表作文

☆ 内容

。学生生活を中心とした内容
。将来に向けての希望展望があるもの

☆ 順序

(1) まず大まかな内容を決めよ

学業と仕事の両立をした

(2) 次にいくつかの段落ごとの内容を決めよ

私の現在の生活、仕事をしながら夜間に行っていること

仕事が大忙しなのであまり学業は必要ないと思いはじめたこと

私の信念、いったん物事を始めたら途中で止めてはならないこと

私のこれからのあり方、仕事に生かすための学業をする姿勢を保つこと

(3) 題名を決定せよ

学業と仕事について

(4) 書き出し

生きて行く^{マツ}ということはいへんなことである。

(5) 書き始めよ

生きていく^{マツ}ということはたいへんなことである。のんびんだらりと、人生を過してしまふものならそれでいい。がしかし人間には欲というものがある。車を買いたい、クーラーを買いたい、レジャーを楽しみたい、できれば家も建てたい。人並の生活、いやそれ以上の生活を誰もが望むのが普通である。

私は思う。同じこの世に生を受け生きていくなら、のんびんだらりの生活ではだめ、自己のあらん限りの力を出し、何事に対しても全力であたり、有意義な毎日を送り、そして人生を悔いのないものにしたいたい。これは私がかなり以前から持ち続けた願望である。(以下略)

○十月、近代詩を学習した後、詩の創作。

○十一月には「短歌について」木俣修（明治書院 現代国語一）の文章を読み、高校生が自分の生きている現実を、短歌創作をとおして省みさせた。（十二月一日、定時制学習指導研究会にて研究発表および公開授業実施）次の指導案の第三時を公開授業に充てた。

研究授業指導案

日時 昭和五四年十二月一日（土） 一限

対象 機械科一年 十人

教材 現代国語一 新修二版（明治書院） 単元七 短歌に

ついて 木俣修

学習目標

万葉以来今日まで脈々と続いてきた伝統的短詩型文学短歌には、それぞれの時代の人々の生活と感情が豊かに反映している。そして現代もまた複雑な社会に生きる人間の考えや、感情を、三十一文字の中に盛りこんでいる現代短歌がある。本単元では、高校生の創作した短歌を鑑賞し、自分たちも気軽に日頃の生活をおりこんだ短歌創作を試みることに、現代短歌理解の出発点とする。

	学習目標	展開	備考
1.生徒の短歌について の知識、理解の程度を 確かめる	(導入) 短歌とは		(簡単な説明)

第四時	第三時	第二時	第一時
1.生徒創作歌をみんな で鑑賞	2.創作 作歌を紹介	1.本文引用の短歌 鑑賞	2.創作の経験の有 無 3.音読 4.五七五七七に区 切らせる
相互批評	五七五七七を原則 とする 文語表現できると ころは文語表現で	(→)の引用短 歌について鑑賞、 発表	現代短歌はどんな ところで生きている か (展 開) 指名読み 本文引用の高校生 の短歌を、五七五 七七で区切ってみ る
プリント化	随時相談のの つてやる		短歌の部分は特に ゆっくり音読させ る 字余りの歌もある ことを注意 友だちにたよらな い

公開授業では第二時の未消化部分に時間の大半をとられ、創作に必要な時間は、わずかしかたれなかったが、一人の生徒が即席に一首つくり諸先生方の前でユーモラスに発表してくれたので私としては救われる思いがしたものである。

○さて、本校では昭和二十四年より、だいたい年一回のペースで、学校文集「あすなる」を発行している。今年度は第三〇号を数えるにいたっている伝統的な文集である。最近では毎年卒業生に手渡せるよう二月末日発行となっており、中に卒業特集をおり込むようにしている。この文集に載せる原稿は、十二月に国語の時間を使って書かせている。また文集にはそれまで生徒が書いた文章や創作などを選択して入れてやり、できるだけ多くの生徒の作品が収録できるように配慮している。

「あすなる」作品掲載数

(人数別)

教師 5人 生徒 延べ 91人

(ジャンル別)

卒業特集 40編 生活体験発表作品 10編 随想 7編 読後感想
文 3編 詩 15編 短歌 21首

○一月から二月にかけての俳句学習のあとの創作は、短歌よりむずかしいという感想がほとんどであった。俳句の世界を充分理解できていない一年生の段階では少し無理か。

予定していた最後の、三月、手紙の書き方の学習は、教材プリント三枚の投げ入れ教材であるが、小説(「城の崎にて」)が終らず、

とうとうやらすじまいに終ってしまった。二年生になってやるつもりである。

最後に、詩・短歌・俳句の生徒作品を一部紹介しておく。

詩

クラス

私の組は色々な人間がいる

いろんな性格がある

いろんな顔もある

いろんな足もある

いろんな手もある

いろんな口もある

いろんな鼻もある

いろんな耳もある

いろんな人間がいる

ぼくはクラスのみんなが好きだ

仮面

人人人、いく人も人人人

皆それぞれに、仮面のパーツをそなえ

場面場面に応じ、仮面をはずしては又

自分が恐くなり、又仮面をつけては

平然とした顔で街を歩いている

「人とは仮の姿」と思う僕も

仮面をつけて、どこかで笑っている

真理

幾千幾万あるだろう

世の中の矛盾というものが

理屈があれば道理もある

理性があれば感情もある

義理があれば人情もある

それはすべてつくられたもの

人が勝手につくったもの

誠の真理はどこにある

不変の真理はどこにある

私はそれを求めたい

短歌

今宵また帰る家路にあかりつき五十路をすぎし夜の学生

夕ぐれにカラスが家に帰るころ我ら集うよ市工の学舎

鐘の音の今日も終りぬ勉強のむずかしきことばかり定時制に

て学ぶ

遠ければ思い出しけり故郷の緑にかこまれ学ぶ子どもら

夜の部屋先生だけの声がする校舎にひびくしずかな時間

ふるさとの幼年時代思い出し仕事中にしばしなぐさむ

冬空を見上げて見てはふるさとの父母の顔目に浮かびけり

俳句

除夜の鐘迷う心に突きささる

降る雪や家路を急ぐ定時の子

雨降りて寒き身にしむ冬の夜
くちなしの強きかおりに目をとじる

生徒の作品は、夜学生生活を詠んだものが圧倒的に多い。五十を過ぎて向学の志に燃えた苦学の生徒、山陰の山村から広島鉄工所に就職した少年の苦しさ、ふるさとの両親を懐しむ歌や詩、人生をうたった詩、それらの作品は、素朴だが、胸を打つものが沢山ある。私は、創作をとうして、社会の荒波にもまれる生徒たちの心に、やすらぎにも似た清風をそそいでやりたいと思っている。

おわりに

本稿は年間をとおしての全般的実践を紹介したので、一つ一つのきめ細かな報告にはならなかった。また内容も、言語教育の面から見ればまさに初歩的で系統的に欠け、場あたりの拙いものである。今後とも試行錯誤をくりかえしながら、一歩前進二歩後退の精神で歩みたい。

(広島市立舟入高等学校教諭)